OBエイトの活動

中大理工ボート部 OBエイト監督
福田 匠太

中大理工OB・OGエイトの監督を務めております49期の福田です。OB・OGエイトは、2014年7月27日にOBでエイトを漕ごう！『プロジェクト8』として発足しました。月1～2回、戸田か鶴見川で漕いでいます。今年も秋から練習を始動し、目標は6月頃に開催される関東理工系レガッタの1000mレースで優勝することです。

OB・OGの皆様の中には、現役時代に関東理工系レガッタ優勝を目標のひとつにしていた方もいるかと思いますが、中大理工OB・OGエイトも同じものを目指しています。

OB・OGとなっても、横一線に艇が並ぶと闘争心が湧いてくるものです。「アテンション」の合図で緊張と集中力が高まり、「GO」で冷静さを保ちながらオールに全力を込める。他のクルーを見ながらトップで漕ぐときは疲れを感じず、無情にも離されたときの苦しさは永遠に感じる。私自身も、ボート特有の勝った時の気持ち良さ、負けた時の悔しさを社会人になっても味わえるとは思ってもいませんでした。

OB・OGエイトはクルーの世代がばらばらです。それに伴い漕ぎ方もばらばらでした。「正しい漕ぎ方」が一つでないボート競技では、クルーで独自に一つの漕ぎ方を創ることが大切です。それぞれ身体に染み付いた漕ぎ方を変えることは簡単ではないですが、クルーミーティングや艇上で、先輩後輩関係なく意見を出し合い、イメージを共有し、一つの漕ぎ方を目指すのは現役時代と変わりません。

OB・OGエイトが関東理工系レガッタ優勝を目指して練習を始めたのはここ数年のことです。他大学や他団体のOBクルーと並べることは何度かありましたが、肝心の関東理工系レガッタでは最下位となっています。2018年6月開催の関東理工系レガッタでは、前半500mは他クルーと並んでいましたが、後半500mで離されてしまいました。課題が多く見つかり、今年はクルー編成から変更し、改善を図っています。11月の鶴見川での練習が今シーズン初のエイト練習となりましたが、バランスが良く艇速のメリハリが感じられました。これから細かい技術までひとつひとつ詰めていき、クルーを完成させていきたいです。

また、活動がさらに盛り上がり、レガッタで活躍し、ボートを楽しんでいる姿を現役部員に魅せることもOB・OGエイトの役割のひとつであり、目指すものだと思っています。

レガッタで優勝するためには、エイト参加者の増員、練習頻度の増加が不可欠です。

艇の上で熱くなれる時間を共有できるOB・OGを募集しています。まずは1月の初漕ぎから顔を出してみませんか？皆様のご参加をお待ちしています。

第50回 全日本選手権 出漕の思い

9期 緒方 孝一　10期 加納 宏一
10期 中村 和史（文責）

1972（昭和47）年シーズンの春、諸先輩方々の資金協力と現役部員の拠出により、舵手付シェルフォアの新艇を購入することができた。これは、理工ボート部創設以来の最も大きな買い物であった。

それまでの理工ボート部では、年間を通して関東理工系レガッタと相模湖レガッタの二つの競技会へ出漕することが、慣例となっていた。当時、既に大学ボート競技界の主流はシェル艇であり、戸田ボートコースで練習する大学クルーの大部分は、シェル艇であった。それゆえ、新艇購入を契機に理工ボート部がナックル艇からシェル艇へステップアップすることは、当然の方針と考えられた。そして、目標とすべき競技会は、11月初旬の全日本選手権への新艇による付フォア出漕であった。

ところが、10月の相模湖レガッタ終了後、全日本エントリーの時期に最強メンバーを集めることはできなかった。主力であった3年生は、それまでの「慣例」に従い全員早々にリタイアしてしまったのである。目標は、この時点で頓挫したかと思われたが、我々の強い思いが決して消えることはなかった。艇庫の片隅に埃を被って眠っていた、本チャンの古い付ペアのシェル艇に目を付けたのである。すなわち、付フォアが駄目なら付ペアの種目に出漕することを決意するに至った次第である。

メンバーは、S中村和史（177㎝78kg2年）B緒方孝一（186㎝78kg3年）C加納宏一（2年）。中村は主将に就任したばかり。緒方は2年生からの入部であり現役継続を強く希望。加納は直前まで本チャンのシェル艇Coxを半年間経験。このメンバーで10月中旬より、本チャンの戸田合宿所に合流して約1カ月間の練習に入った。1年生には、交代で合宿所の食当を担当してもらった。

日程に余裕がなかったので、今思い返せば学業を多少犠牲にしたかもしれないが、平日昼間も乗艇を重ねることによって概ね順調に練習メニューを消化することができた。ライバルクルーの様子が分かってくるにつれ、好勝負になるような感じを持っていた。レースは3艇による一発決勝となった。

レース当日の天候は曇り、弱い逆風のコンディションであった。前半は力を温存し終盤に様子を見てスパートを掛け、小差で勝てばよいという作戦で臨んだ。出艇後スタート地点へ向かう途中、接戦でゴールした他校新人戦エイトの優勝歓喜を間近に見て、我々クルーの士気は増々高まった。スタートは慎重に出て、やや早めにコンスタントにし前半は前に出ようとせず1000mは他艇とほぼ横一線で通過した。クルーは冷静で相手の様子がよく見えていたように思う。1700m中大艇庫の辺りから気合が入って（特にバウ）強めに引き、残り100mで先頭に出てそのままゴールした。2位との着差は2秒あまりで、感覚的には余裕のゴールであった。短期集中の効率良い乗艇練習ができたことが、勝利につながったと思う。

レース後、本チャンの合宿打上げに合流した席では、優勝歓喜の勢い余って合宿所のガラスを割る事件を起こしてしまった。しかし、その場で本チャンからのおとがめもなく、その後、修理弁償の請求もなかった。レース以外の一つの思い出である。

スポーツは人の力を引き出し、人の繋がりを強くすると言われる。理工ボート部の現役諸君は、常にこの力による「成長」を感じながら活動していることと思う。期待した成果が得られないときには、それまでの「慣例」を見直し、ステップアップするための「行動力」が必要である。「慣例」による単なる継続は、衰退の始まりとなってしまう。永き伝統は受け継ぎつつも、新しくチャレンジをする「行動力」を常に求め続けていって欲しい。

全日本選手権に出漕して得た成果は、優勝ではなく、「人の繋がり」であり「行動力」の大切さであった。これは、クルー3人の共通した思いである。

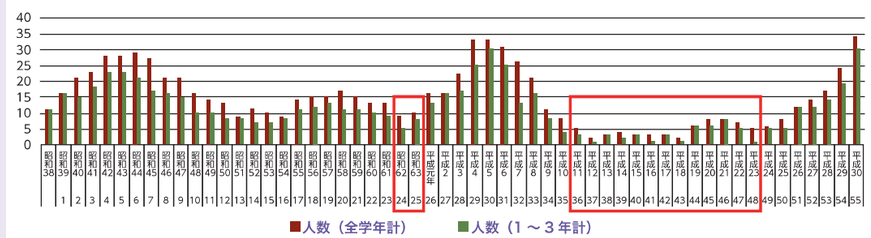
レース状況（左より、1位中大理工、3位教育大、2位トヨタカローラ札幌）

クルーメンバー（左より、C加納、B緒方、S中村）

表彰式

廃部の危機を救った仲間たち

中大理工ボート部　部員数の遷移



廃部の危機に瀕した年代

年	当時の主将	活動人数
昭和 62	藤田主将	5名
平成 12	名越主将	1名
平成 14	大野主将	2名
平成 16	山下主将	1名
平成 18	加藤主将	1名
平成 23	小林主将	1名
平成 24	福田主将	6名

復活

理工ボート部の廃部危機を乗り越えて

監督　中島 弘高

中央大学理工ボート部は、ボートに興味を持った学生が集まった「サークル」であります。求心力がなくなれば必ず消滅します。どんなサークルでも存続できるには、そこに何か魅力があるからです。

理工ボート部は廃部の危機を迎えた時期がありました。学生に来てもらえるようにすること、来てくれた学生が満足できるようにすること。廃部危機を乗り越えたことは、理工ボート部の魅力を探求する旅路だったように思います。

危機と隣り合わせの12年

表のとおり20年前、35周年記念を迎えた1998年に遡ります。当時は女子ダブルスカルがインカレで大変な好成績を残し、全体的に嬉々とした雰囲気にありましたが、すでに存続の危機は始まっていました。入部希望者不足、せっかく揃えたフォアやエイトなど自艇の劣化、レース・練習方法やリギング等の技術継承不足など、負のスパイラルが次々と押し寄せます。

私は監督として現役学生とよく話しましたが、私自身に戦略性がなく、その場を切り抜ける対応しかできなかったように反省しております。それでも辞めないで一緒に過ごしてきた学生諸君は、ありがたく、本当に根気よく頑張ってくれました。

ついに12年後、いよいよ理工ボート部は廃部寸前に追い込まれました。中大杉並高校の練習や鶴見川ボートクラブの練習に頼み込んで合流させてもらいましたが、部員を素人のようにしか扱ってくれなかったことは、とても悔しい思い出です。

頼れるのは、やはり身内

折しも2010年には、中大艇庫の建替えがあり、一緒に協力できた私たちには強力な相談相手ができました。それが、本チャンの渡邊孝憲総監督（当時）と、中大杉並高校の山田篤史先生です。

藁をもつかむ思いで理工の状況と救済策を、お二方に相談しました。救済策とは思い切って「理工ボート部を中杉高校生OBに乗っ取ってもらう」というものでした。

この結果、理工ボート部の再建を試みたいというチャレンジ精神のあった中杉OBの学生が練習や合宿に参加してくれました。2年後には、部の変革を成し遂げてくれました。

また並行して、このOB会自体の立て直しを、樋口会長（当時）始め、有志の皆様に懇願致しました。その結果、内藤会長以下、初期役員皆様で役員会が発足しました。この礎が現在の現役活動に大きく寄与することになったわけです。

雰囲気づくりとマネジメント

こうして復活した2012年には、理工ボート部を救ってくれる人たちがどんどん集まってきました。

入部した学生たちはとても優秀で、理工ボート部の活動目的をしっかり表現でき、ボートの魅力を感じて入ってきた後輩が続けられる良い雰囲気を醸成してくれています。これこそが追い求めていた理工ボート部の「和」だと気づかされます。

引き続き私は、現役学生が自ら理工ボート部や自分自身の引退時のゴールイメージづくりを考えてもらいたく、監督のミッションとしてサポートしたいと考えています。

まだ同期がいたころの名越さん

長らく２人で頑張った大野さんと小林（修）さん

中杉高校 OB と隅田川を漕ぐ小林（亜）さん

廃部を考えた当時

48期 小林 亜湖

心底辛かった最大の危機を、あきらめずに乗り越えた小林（亜）さんのメッセージです。

私が入部した当初は先輩たちや同期に恵まれ、非常に楽しく活動を行うことができておりました。しかし、思うように新入生の勧誘がうまくいかず。

ついに3年生で1人になり、非常に心細かったときに、監督と部活の今後を話し合う機会を設けてもらいました。その時に、部の存続について、全面的に監督が私の気持ちを尊重してくれたことが嬉しかったことを覚えています。その後、監督が鶴見川ローイングクラブの練習に紹介してくれたことで、エイトで大会に出ることもでき、楽しい経験になりました。

廃部の危機に対しては、中大杉並高校への声掛けがあり、福田君がまさかの入部！引退までボート部を続けてこられたのは、本当に多くの方達に支えてもらったからだと実感しました。そして何より、ボートをあきらめずに続けてよかったこと、ボートを通してたくさんの方に出会えたことが本当に良かったと思います。

中途入部でも救えた当時

49期 福田 匠太

復活の立役者となった中大杉並高校ボート部出身の福田さんのメッセージです。

私が理工ボート部を知った時は、活動している部員が間もなく4年生になる小林さん一人だけで、その先輩が卒業すると同時に廃部になる状況でした。

そして何を思ったか、監督に言われるがまま、3年生の4月に入部しました。

すぐに勧誘の時期が来ましたので、「さわやかなスポーツ」「男女仲がいいよ」入学式で試乗会の案内チラシを配りながら、嘘だけで勧誘しました。

まんまと騙された熱い男が二人。

そんな彼らと共に練習していたら、いつしか成長してしまい…。記録まではありませんでしたが、後輩二人のダブルスカルと並べて、負けたレースが印象に残っています。

昭和時代もあった危機からの復活

27期 田渕 賀裕

30年ほど前にも部員がいない代（26期）がありました。そんな代を下から支えた田渕さんからのメッセージです。

入部当初は、一つ上の先輩がいないことは、あまり気にしていませんでした。ただはじめの頃、先輩たちが妙に優しかったのは、あとあと考えれば、本当に我々新入部員に、絶対に辞めて欲しくなかったんだろうな～と、想像します。まぁそんな雰囲気は長くは続かなかったんですが…。

そして、当時は引退がゴールデンウィークのお花見レガッタだったので、我々の学年は、2年生になったばかりの春には、二つ上の先輩方が引退して、もう自分たちが幹部として、部を引っ張っていかなければならなくなりました。

苦労したのはそれからです。自分たちが、まだまだ漕ぎ方やトレーニングの方法さえよく理解していないのに、後輩たちが何人も入部してきて、当時の我々は虚勢をはる事で精一杯だったのではないでしょうか。

それでも幸い本チャンとの関係が悪くはなかったので、必死になって、本チャンの部員に練習方法を聞いたり、当時あまり出ていなかった荒川での練習を真似したり、ウェイトトレーニングを取り入れたり、ビデオ撮影を取り入れたりと、悩みながらも、もがいていたように記憶しています。

最終的には、我々の学年はたいした成績は納められませんでしたが、その後後輩たちがメキメキ上達していき、本当に外から見て恥ずかしくない漕法を身につけてくれた事を、密かに自分達の練習方法の工夫の賜物ではないかと、喜んでいます。

同時、妙な優しさで迎えてくれた先輩方と、虚勢をはる我々に、生意気な文句を言いながらも、ついて来てくれた後輩たちに、今でも心から感謝しています。

危機を乗り越えた仲間たち